

都道府県別賞一等

保険がくれた安心と、ぼくの未来

徳島県 鳴門教育大学附属中学校 一学年

宗田 結音

ぼくの家は母子家庭だ。母は、ぼくを一人で育てることになった時、きつとたくさんの不安を感じていたと思う。そんな中で、「自分にもしものことがあつたら、息子が困ってしまう。」と考え、生命保険に加入したそうだ。

その話を聞いた時、ぼくはまだ保険の意味がよくわからなかった。ただ、「母はいつもぼくのことを考えてくれているんだな。」と感じて、胸があたたかくなかった。

しばらくして、母が人間ドックを受けた。その結果、卵巣嚢腫という病気が見つかった。突然のことで、ぼくは不安になったけど、母は落ちついた様子だった。そして、「保険に入っていて本当によかった。」と言っていた。

入院費や手術代が保険でまかなえたことで、母は仕事を休んでも安心して治療に専念できた。もし保険がなかったら、経済的な不安が重なって、気持ちにも余裕がなくなっていたかもしれない。保険のおかげで、母は前向きに病気に向き合うことができた。

退院してから、母はいつも通り元気に働いている。ぼくの弁当を作ってくれたり、学校の話を聞いてくれたりする母の姿を見ると、「保険が母の強さを支えてくれたんだ。」と思う。そのたくましい後ろ姿を見ると、ぼくも母のように誰かの安心を支えられる人になりたいと感じるようになった。

保険はお金のことだけでなく、心の安心ももたらすものだ、母の経験を通して学んだ。病気やケガは誰にでも起こりうる。でも、保険があればその時に備えることができる。そしてその「備え」が、生活を支える力になることを、ぼくは身近な体験から知った。

最近、母から聞いた話で心に残っていることがある。母が入っている保険には、もし病気になって余命が半年ほどと判断された場合あらかじめかけていた保険金を先に受け取ることができる制度があるという。これによって、家族との思い出づくりや、保険の対象外となる高額の新薬を試す費用にも使えるそう。母は「万が一の時にも、自分らしく過ごしたい。」と話していた。

その話を聞いて、ぼくは「保険は命の時間に寄り添うものでもあるんだ。」と感じた。ただ治療費を支えるだけではなく、残された時間をどう過ごすか、その選択肢まで与えてくれる。そのことを知ってから、保険の大切さがまた一段と深く感じられるようになった。

第63回中学生作文コンクール

ぼくはまだ学生で、保険のしくみすべてを理解しているわけではない。でも、母の話や経験から、「いざという時に備えること」がどれほど大切かを実感している。情報を集め、必要なことに目を向け、自分が選ぶ責任をもつ、そんな準備のできる人になって、家族やまわりの人の安心につながる存在でありたい。

保険は、「いざという時」のためのものだけけど、それがあることで、日々の生活にも安心と余裕が生まれる。そのことを、これからも忘れずに、自分の人生に活かしていきたい。